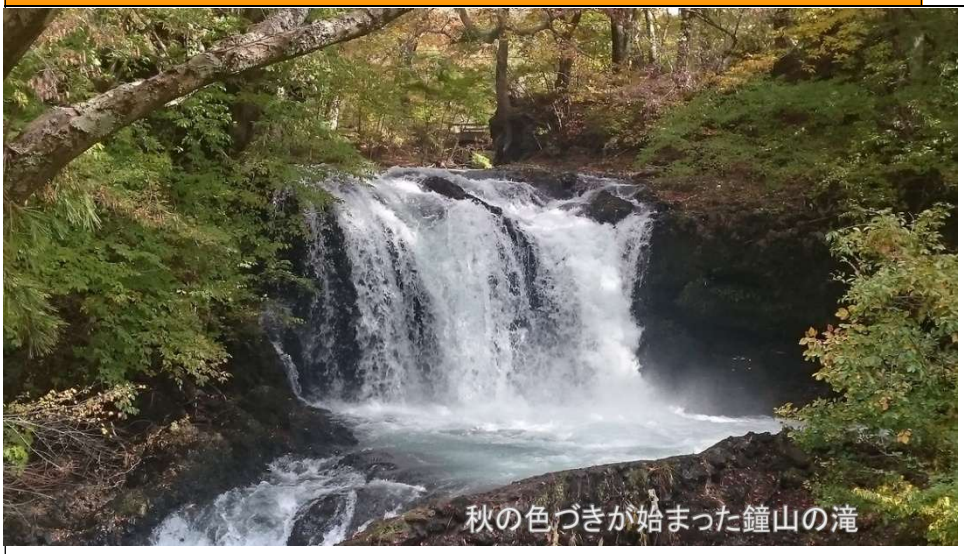
ぼちぼち

NPO 富士北麓まちづくりネットワーク会報

《 第92号 》

発　行：ＮＰＯ富士北麓まちづくりネットワーク
発行日：２０２６年１０月１日
責任者：代表理事 飯 田 勇 夫
住　所：〒403-0005 山梨県富士吉田市上吉田東 3-1-77
制　作：広報渉外部会
事務局電話＆FAX：0555-23-0202
http://www.mfi.or.jp/machizukuri/index.html


秋の色づきが始まった鐘山の滝

「法の支配を取り戻し、国際秩序の立て直しを」

代表理事 飯田勇夫

戦後８１年を迎えた今、私たちは改めて「戦争のない世界」とは何かを考えなければならない。第二次世界大戦の惨禍を得て、国際社会は「力による現状変化を許さない」という理念を掲げ、国際連合を中心に、国家間の紛争を法と対話によって解決する方法を築いてきた。

日本は戦後の平和と繁栄を享受しながら、その秩序を学んできている。しかし現在その土台が大きく揺らいでいるのである。

世界では、軍事力や経済力を背景に、自国の利益を優先する米露中の行動が目立ち、国際法や国際的な合意よりも「自国にとって何が得か？」が優先され、弱い立場の国の主張が軽視される場面が少なくない。もちろん、国家が自国民の安全や利益を守ることは当然であるが、かといって国際ルールを無視した武力や圧力により、相手を従わせることが許されるとすれば、８０余年あまり築いてきた国際ルールは崩壊した事になる。

国際刑事裁判所（ＩＣＣ）は、ジェノサイド（集団殺害）・人道に対する罪・戦争犯罪・侵略犯罪の４項目を法によって裁く国際機関である。

ロシアのプーチン大統領に出された逮捕状は、ウクライナ領から約 20,500 人の子供達を強制移送させた「人道に対する罪」によるものであり、また、イスラエルのネタニヤフ首相はガザ地区の住民に対して食料・水・医薬品・燃料・電気など、生存に不可欠な物資へのアクセスを意図的に奪った、これも人道に対する罪により逮捕状がでている。２０１６年には「国連海洋法条約」に基づいて設置された裁判所が中国の南シナ海海洋進出について「違法」判断を下したにもかかわらず、「あのような紙切れは何の効力も持たない」と中国政府は一蹴、米国のトランプ大統領に至っては、イスラエルと共に実施したイランへの先制攻撃は国連安全保障理事会の承認を得ておらず、自ら「国際法違反」を自覚したのか「ＩＣＣは不要な組織であり、赤根所長を制裁しろ！」・・・



ポチたまの部屋

２、３年前から「川柳」を作っている。山日は毎週、日曜日の紙面に読者が応募した川柳の中から選んだ１２句を掲載しているので、私も時々、応募しているが、その多くは落選する。そんな句も含めて最近の作品を掲載する。「女性首相 女性天皇 嫌なのね」「睡眠が０から３時間って 本当なの」「国会議員 じゃない党首が 幅きかせ」「損壊は 国旗よりも 物価高」「８％ 私の悲願が 迷手中」「さあどうする 秋の国会、下駄の雪」（Ａ）

自国法には厳しく、国際法は蚊帳の外

先の大戦で、戦勝国となった米国などが主導して設立したのが「国連」で、国連憲章は主権と領土の尊重、紛争の平和的解決を明示しているにもかかわらず、世界の平和に責任を持つべき「安全保障常任理事国」である米・露・中国が公然と国際法を破り国連は機能不全に陥っている。

にもかかわらず、自国の意に沿わない国には追加関税、重要鉱物の輸出規制、海峡封鎖など武力弾圧、経済弾圧がまかり通り、全世界がその渦中に引きずり込まれている。

なぜこうなるのか。多くの国には「法律違反→警察→裁判所→強制執行」といった仕組みがある。しかし、国際法は「国際法違反→国際機関による非難・判決」に留まり、警察的組織、強制執行させる仕組みが無い。その一事に尽きる。

かつてのアメリカは「世界の保安官」を自認し、警察的役割を果たしてきたが、今や世界を無法地帯に追いやっている。

戦後、国際秩序がなぜ築かれたのか？改めて見つめる必要がある。平和とは、単に戦争が起きていない状態ではない。国際的なルールを守り紛争を武力ではなく対話と法によって解決しようとする状態を作り出すことが重要、敗戦の惨禍を経験した日本だからこそ「法の支配」の重要性を全世界に訴える責任がある。大国であろうとなかろうと、法の前では平等である事を忘れてはならない。

１９世紀後半、アメリカ西部で活躍した実在の名保安官であり法執行官であるワイアット・アープに無法地域を立て直してもらいたいものである。



時は流れて

会員　川越うらら



「山中湖で法村さんを知らないとは“もぐり”だよ」

富士吉田在住の郷土史研究家というＹ氏は、ぞんざいな口調で名刺を指し出した。

「それって、どういう意味ですか？」

もう２０数年前のことで、故父の代役としてある出版記念会に参加した時の事だった。その時の不思議な予感を今でも記憶している。

後に知人から法村さんを紹介される機会があった。

「ＮＰＯまちづくりというネットワークを立ち上げるので遊びに来て」と誘われた。

その場は軽い挨拶だけだったので、NPO が何なのか分からないまま、好奇心に任せて街中の古い建物のドアを開けた。

「あら、よく来たわね。仲間が欲しかったの」

ああこの人が例のＹ氏の話の女性なのだ。彼の事を話すと「私ね、あの人好きじゃない」の一言。なんだかおもしろそうな人だと思った。

人の縁は不思議なもので、私は翌年の設立総会にしっかり席に座っていた。

「橋は渡らないと先に行けないわよ」

何度ハッパをかけられたことだろう。その語、彼女から著書をいただき、読み進む内に、なるほど開拓精神がどこから来るものなのか分かった。やはりベースには大きな中国大陸があった。

それから紆余曲折もあったが、様々なイベント、勉強会、海外旅行へもご一緒させていただいた。人を巻き込んでは何かをやり遂げる。賛否はともかく、常に確かな結果を残していった。その根底には人好きなところ、人を信じる何かがあった。

時は流れ、彼女は長年住み慣れたこの地を去り、春先に帰らぬ人となった。

ありがとう法村さん！お会いできてよかったわ。

会報「ぼちぼち」は、インターネットホームページでもご覧いただけます。

URLは、https://www.mfi.or.jp/~machizukuri/ です。

会報に掲載する記事は、随時受けております。

普段の生活の中で考えている事や身近な出来事、 是非皆で共有しましょう！

広報渉外部会メールアドレスは、mkin1962@yahoo.co.jp まで、お待ちしております!!



現場の生の声が教えてくれたこと
～能登とつながるお話し会に参加して～

会員 栄原かほる

６月２０日（土）、市民ふれあいセンターで開催された教養講座「能登から学ぶこれからの生き方」に参加しました。語り部は、石川県珠洲市で被災され、復興支援や能登の現状を全国に伝え続けていらっしゃる一般社団法人ＮＯＴＯにじのひかり代表理事の竹下あづささんです。

実は、私と竹下さんとの出会いは今年２月のことでした。全国を巡って珠洲市の現状を伝えていた彼女が河口湖を訪れた際にお話を聞き、「一人でも多くの人にこの声を届けたい」と強く感じたことが、今回のお話し会への思いにつながっています。

当日は約６０名の参加者が集まり、竹下さんが本音で語ってくださる現場のリアルな姿に引き込まれました。その中から、特に心に残ったお話をご紹介します。



【震災直後のリアルと被災者の工夫】

- **避難所の現実と自活の力** 元旦の発生だったため帰省客も多く、指定避難所に入りきれない人々はビニールハウス等に身を寄せたそうです。廃校などの避難所では、一週間ほどするとおばあちゃん達が大きなかまどで炊き出しを始め、畑の野菜を活用して自活していました。一方で、大きな避難所では備蓄が不足し、数日間子どもたちが空腹に耐える状況もあったとのことです。
- **「報道」と「現場」のギャップ** 孤立集落の救助が急がれると報道される中、現場では隆起した岩場からタコやサザエを獲ってサバイバル生活を楽しんでいた高齢者もいたそうです。「助けが出ないと危険」という一見正しい見解も、現地の暮らしや地域性によって感じ方が異なるというお話は非常に印象的でした。
- **地域のコミュニティが救いになる** プライバシーを守るための個人テント設置は、時にお年寄りの孤立や異変への気づきを遅らせるリスクもあります。普段から祭りなどを通じて顔の見える関係があった珠洲市では、雑魚寝の避難所でも「いつもより避難所は楽しい」と語るおばあちゃんがいたほど、コミュニティの存在が心の支えになっていました。
- **たくましい智慧とインフラの工夫** 自衛隊のお風呂が来る前に自分で山から水を引いて風呂を作ったおじいちゃんや、薪ストーブ・川での洗濯など、昔ながらの生活の智慧が災害時に大きな強みを発揮した事例も紹介されました。

【支援・情報で本当に必要だったこと】

- **発信の重要性と SNS の活用** 電波がつながる場所を探して１月３日から SNS で発信を続けた竹下さんの情報は、外部の人々にとっても貴重な頼りとなりました。
- **「必要な時」に届く支援を** 物資は「欲しい時に届かず、不要な時に山ほど届く」というミスマッチが起こりがちです。本当に困っていた発災直後の燃料不足の際、個人のつながりでガソリンや灯油を届けてもらった経験から、平時からの密な連携の大切さを語られました。
- **「耐える避難」だけが選択肢ではない（二次避難）** 行政が機能不全に陥る中、民間有志がバスや宿をチャーターし、高齢者や要配慮者をいち早く金沢などの安全な温泉地へ移動させました。「劣悪な環境で耐え忍ぶことだけが避難ではない。外の安全な場所に一時避難することも大切な選択肢」という学びは目からウロコでした。

【参加して感じたこと】

竹下さんは「最後は『自助』が何よりも大切」と強調され、現在も全国を走り回っておられます。

日頃の備蓄やインフラ断絶への備えはもちろんですが、何より「地域コミュニティのつながり」の尊さを痛感しました。報道だけでは見えてこない被災者の生の声を聞くことができ、防災やこれからの生き方について深く考えさせられる貴重な機会となりました。

世相を斬る！
国会と記者会見を「軽視」する高市首相

会 員　秋 山 紀 勝

２０２５年１０月２１日、高市早苗首相が誕生してから間もなく１年になる。２０２６年２月の衆院選では自民党が圧勝、単独で衆院の３分の２（３１０議席）を超える３１６議席を獲得した。その後の国会では圧倒多数の「横暴」もあった。しかし、この間、一番注目しなければならないことは、高市首相の国会衆参予算委集中審議への出席と記者会見の少なさである。

◇



７月７日の毎日新聞によると、最近の首相の衆参予算委集中審議への出席時間は以下の通りである。２０２１年・菅義偉＝５３時間３６分、２０２２年・岸田文雄＝６３時間３６分、２０２３年・岸田文雄＝５７時間４２分、２０２４年・岸田文雄＝７３時間４６分、２０２５年・石破茂＝９０時間６分。２０２６年の高市早苗は２９時間３６分。（菅から石破までは通常国会。高市は特別国会の７月６日現在）。７日以降、高市が出席する衆参予算委集中審議があったとしても、６日の時点で２９時間３６分は際立って短い。

◇

次に記者会見であるが、記者会見には２種類ある。記者会見場で大勢の記者に参加して、一番後ろには多くのテレビカメラが並び、記者会見する側（この場合は高市首相）が、質問する記者と質疑応答する「本格的な会見」と記者団の前で首相が立ち止まって、記者の質問に答える「ぶら下がり」である。



ネットの資料によると、２０２５年１０月２１日の就任から２０２６年３月２１日までの５カ月間で、高市首相が「ぶら下がり」会見に応じたのは３４回だった。同じ５カ月間で比べると、石破茂・５７回、岸田文雄・９０回、菅義偉・５０回安倍晋三・４４回。高市首相の少なさが分かる。

しかし、高市首相は「X（旧ツイッター）」への投稿が多い。最近の５カ月で３７０回を記録する。

記者会見と「X」への投稿の違いは何か。記者会見は記者との間で時には丁々発止のやり取りがあるが、「X」への投稿は投稿者の一方的な意思表示である。高市首相の場合、「本格的な会見」は手元にデーターがないが、「ぶら下がり」さえ少ないことから推測すると、石破茂前首相らと比べてかなり少ないのではないか。

◇

政治アナリストの伊藤惇夫氏はネット以上で「高市首相は会見などで記者と接してやり取りするのが苦手かも知れない」と言っている。しかし、日本を代表する首相なんだから、国会答弁や記者会見を増やして欲しい。制限時間なし、フリーのライターも含めてライターなら誰でも参加自由、という会見を期待したいが、無理か……＝敬称略＝（A）



身近な防災と、地域の助け合い
～行政の現場経験から伝えたいこと～

会 員　水 越 欣 一

近年、日本各地で大規模な地震や豪雨災害が頻発し、被害が拡大しています。
「地球温暖化や気候変動の影響かもしれない」と言われますが、決して他人事ではありません。
私はかつて富士吉田市で防災担当として、地域防災計画の見直しなどに携わりました。当時、専門的な被害想定の策定や被災現場の生の声を伺う中で強く感じた、「命を守るために本当に必要な備え」についてお伝えしたいと思います。

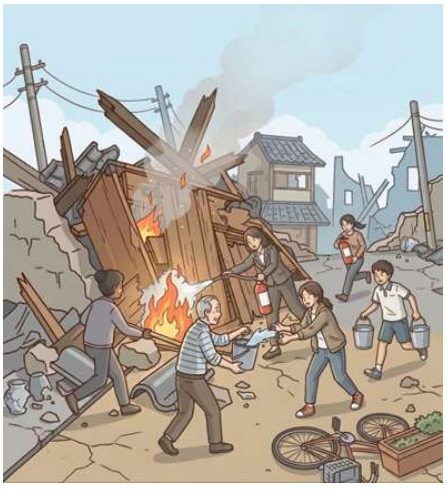
「想定」を知り、我が家の備えを固める

皆さんは、富士吉田市で最も大きな被害が想定されている地震をご存知でしょうか。南海トラフ地震ではなく、市内に影響を及ぼす「愛川唐木断層地震」です。当時の計画では、この地震により市内で7,000人もの避難者が発生すると想定されていました。
行政はこうしたデータをもとに避難所や備蓄品を整えていますが、自然災害は時にその想定を大きく超えてきます。だからこそ、公的な支援（公助）だけに頼らない「我が家の備え」が欠かせません。



当時、阪神・淡路大震災で実際に検死作業へ当たられた医師から直接お話を伺う機会がありました。６千人を超える犠牲者の多くは「圧死」でした。圧死は「即死」とは異なり、強烈な苦痛を伴うため、遺体は目が充血し悲痛な表情になられているそうです。もし大切な家族がそのような最期を迎えたらどうでしょうか。（想像したくありませんね。）
だからこそ今すぐできる備えとして、家具の固定や部屋の安全確認を強くお勧めします。あわせて、ハザードマップで自宅周辺のリスクを確認し、いざという時の避難場所や家族間の連絡方法をあらかじめ決めておくこと。そして、食料や生活用品を少し多めに買い置きして日常的に使い回す「ローリングストック」などを活用し、1週間～10日分を目安に家庭備蓄を用意しておくことが重要です。

いざという時に命を救う「ご近所の手」



大規模地震では同時多発的に火災や怪我人が発生します。当時、実際に被災された方から「消防車や救急車は来られない」という現実を伺いました。倒壊した家屋や寸断された道路が立ちふさがり、隊員たちが必死になっても現場に辿り着けないのです。
そこで決定的な役割を果たすのが、地域のコミュニティによる「共助」です。
火災も初期段階であれば、声を掛け合って小さいうちに消し止めることができます。また、家屋が倒壊した場合でも、「あのお宅には高齢の方が住んでいる」「あそこには小さなお子さんがいる」といった情報を日頃から把握していれば、すぐにご近所で協力して救助に向かうことができます。阪神・淡路大震災でがれきから救出された方の多くも、隣近所の人々の手によって助け出されました。
もちろん、救助や消火は自身の安全確保が前提です。無理のない「できる範囲」で助け合うためにも、地域の繋がりが欠かせません。

おわりに

防災の基本は難しくありません。我が家の安全を整えること、そして普段から地域で挨拶を交わし「顔の見える関係」をつくっておくこと。
「いざという時は助け合い、守り合う」そんな温かい繋がりを地域で育むことが、何よりの防災対策になります。今日からできる身近なところから、一緒に備えを進めていきましょう。

事務局だより

NPO事務局　渡 邊 義 広

「能登から学ぶこれからの生き方」



市民ふれあいセンター教養講座 開催！

毎年恒例となっている市民ふれあいセンター教養講座が 6 月 20 日に開催されました。あいにくの雨模様となりましたが、予定していた定員を超える多くの方々にご参加いただきました。日本各地で多発する地震や線状降水帯による豪雨など、かつてない自然災害への関心が非常に高まっていることを強く実感いたしました。

講師にお迎えしたのは、一般社団法人ＮＯＴＯにじのひかり代表理事の竹下あづささんです。能登の魅力に惹かれて石川県珠洲市に移住し、約 2 年後に被災されたご経験をお持ちです。当日は珠洲市から車で 8 時間以上かけて駆け付けてくださいました。

前日に富士吉田へ到着された竹下さんは、夕方に「赤い屋根」で開催されていた「みんなの食堂」にもご参加いただきました。地震で倒壊した家屋の廃材や海岸のプラスチックごみを洗浄して作品を作る「能登の海ごみアート」を子どもたちと一緒に実施していただきました。子どもたちは興味津々で自分の作品づくりに熱中し、予定時間を超えるほどの賑わいとなりました。





竹下あづささんのスーパーパワー！

竹下さんは大変パワフルで超ポジティブ、誰でも温かく迎え入れてくれる魅力にあふれた方です。地震直後から自らも被災者でありながら支援活動を開始し、先頭に立って走り続けてこられました。ブレない能登への強い想いと、明るい笑顔で周りを惹きつけるお人柄です。

現在は「能登の今と日本の未来」を伝えるため全国でお話し会や講演会を開催されており、これまでに延べ 3,000 人以上の方々にメッセージを届けておられます。

「報道されない現場」と人と人のつながり

令和 6 年元旦の大震災、そして同年の秋を襲った奥能登豪雨と、能登半島は立て続けに厳しい自然災害に見舞われました。一瞬にして日常が失われ、混乱と混迷を極める現場の只中にいたからこそ分かる「メディアでは伝わらない生の現状」と、もどかしさについて語っていただきました。

竹下さんを動かしているのは、「報道されない現場の真実をちゃんと伝えたい」という強い情熱です。

「元の状態に戻すことはできない。今の能登の姿は、30 年後の日本の姿かもしれない」そう語る竹下さんは、過酷な現状を受け止めつつも、「今まであったものがすべて失われた大変な時代だが、大きく生まれ変われるチャンスでもある」と前を向きます。そして復興・再生に向け、何より重要なのは「人と人とのつながり」であると訴えられました。

Kaiho 6

さだまるの森プロジェクト」と二地域居住

これからの能登に必要なのは、「地域の人々が集まれる場所」や「珠洲に楽しい場所」をつくることです。竹下さんたちは、全国の応援者とともに集える第二の故郷の拠点として「能登復興さだまるの森プロジェクト」をスタートさせています。

現在、国でも「二地域居住」を推進する新たな仕組みとして「ふるさと住民登録制度」の検討が進められています。これは単なる返礼品目的のふるさと納税にとどまらず、都市住民と地方の行き来を増やし、関係人口・交流人口を育む取り組みです。

「さだまるの森プロジェクト」は、まさにこの理念を先取りするような実践です。ハードルの高い完全移住ではなく、「おばあちゃんの家に帰ってくるような場所」として拠点を作り、10 年後・20 年後も大好きな能登で暮らし続けるための力強いメッセージとなっています。

私たちに投げかけられた「未来への宿題」

講演を通じ、竹下さんが私たちに投げかけた問いは、そのまま私たちの「未来への宿題」でもあります。

「10 年後、20 年後も、この富士北麓地域で暮らし続けるために、今できることは何か」どんなに小さなことであっても、今できることから行動を起こす覚悟を持つこと。それこそが、私たち NPO 法人が目指すべき未来への道標（みちしるべ）であると感じています。

富士吉田市立青少年センター 赤い屋根だより No.64

電話＆FAX：0555-23-7252
E-メール：akaiyane@mfi.or.jp
ホームページ：http://www.mfi.or.jp /akaiyane/
青少年センター赤い屋根　センター長　齋藤容子

この夏は例年並みの利用客があり、忙しい日々を送りました。スタッフの皆さん大変お疲れ様でした。9 月にはシルバーウイークがあり、予約が入っています。今後も身体に気を付けてよろしくお願いいたします。

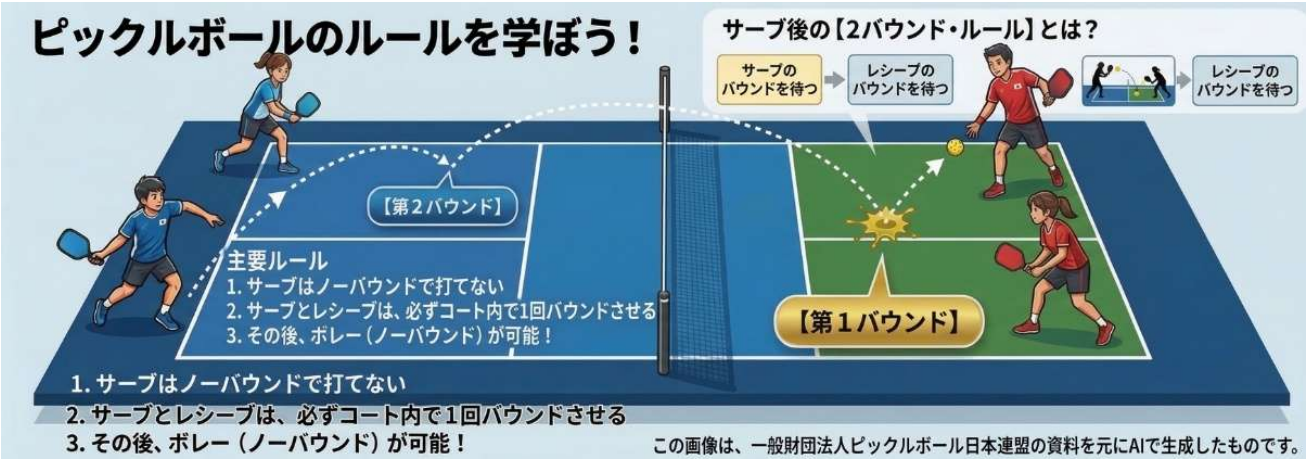
新しい試みとして「ピックルボール」というスポーツの体験会を行っています。テニス・バドミントン・卓球の楽しさを一つにした誰でも気楽に楽しめるスポーツです。

【自主事業の報告】

みんなの食堂+子ども食堂	（7/17 花火、8/28 子どもお茶会、9/18 太極拳）
中央社会学級　「やさしい茶道」	（7/3　7/10　8/28　9/4　9/11　9/25）
富士山ジュニアカレッジ「子ども茶道」	（7/4　7/18　7/29）
ピックルボール体験会	（8/22　8/29　9/19）

【イベント情報】

「ピックルボール講習会」10/3（土）10：00～11：30
専門の指導者による講座です。参加無料



【継続の自主事業】

テディベア（バドミントン）	毎週火・金曜日	13：00～16：00
沖縄三線サークル（あしびどぅし）	隔週　水曜日	10：00～11：30
音楽サークル（オルケスタ若草）	隔週　水曜日	13：00～15：00

FUREAI LETTER

あったかな街をつくる仲間たち



囲碁クラブ　皇貴会

私共皇貴会は発足して１６年が経ちました。

対局はそれぞれの趣向に沿って行いますが、なによりも楽しむことを大切にしております。

近年はゲームソフトの普及によって、手っ取り早く囲碁を楽しむ風潮が見られます。

しかし私たち皇貴会では、相手との勝負に知恵を絞り合うことが本来の囲碁だの姿だと考えております。

新入会員の皆様にはこの方針で指導させて頂いております。

年齢、男女を問いません。興味のある方は是非ご連絡下さい。お待ちしております。



市民ふれあいセンターだより
ふれあいセンター長　佐藤 雄三
TEL 0555-22-1785